

高齢発症のうつ病における形態および機能画像の異常とそれに関連する臨床症状に関する研究

1. 研究の対象

2018年10月から2023年9月までに当院精神科病棟に入院し、入院時にうつ病と診断された患者さん

2. 研究の期間

研究倫理審査委員会承認後～2025年12月31日

3. 研究目的および意義

高齢で初めて発症したうつ病の背景にはアルツハイマー病やレビー小体病、脳梗塞、脳出血などの脳内に生じる別の病気があることが多く、通常のうつ病よりも治療に難渋する要因になるという報告があります。特にレビー小体病（パーキンソン病やレビー小体型認知症）の発症前にはうつ病を発症することが多く、レビー小体病の予備軍であるかどうかを知ることは、今後の治療方針の決定のために重要な情報となります。しかし、多くの施設では当院のように機能画像検査（脳血流 SPECT、DaT-SPECT、MIBG 心筋シンチグラフィ）を実施することが出来ません。そこで、今回は、うつ病の際によく

見られる様々な臨床症状（体感幻覚、幻視、幻聴、妄想、緊張病症状、自覚的認知機能低下、パーキンソン症状、睡眠時行動異常）と機能画像の結果との関連性を調べることで、機能画像が撮影できない状況でレビー小体病の予備軍であるかどうかを判断することが出来る症状を特定し、早期診断につなげることが本研究の目的です。

4. 研究の方法

指定の期間に入院をされた患者様について、入院カルテを参照し、入院の時点でうつ病と診断されていた患者様を特定し、そのカルテ内容を確認し、実際の臨床症状と心理検査の結果、画像検査（脳血流 SPECT、DaT-SPECT、MIBG 心筋シンチグラフィ）の結果、有効であった治療方法（①抗うつ薬単剤、②その他の薬物療法、③電気けいれん療法）、退院時の診断について確認し、結果を分析します。

5. 研究に用いる試料・情報の種類

患者さんの年齢、性別、入院時および退院時の診断、心理検査および画像検査の結果、臨床症状（体感幻覚、幻視、幻聴、妄想、緊張病症状、自覚的認知機能低下、パーキンソン症状、睡眠時行動異常）の有無、有効であった治療方法（①抗うつ薬単剤、②その他の薬物療法、③電気けいれん療法）